6/22(土) まいど！倫々号です。今日は「夏至」です。昼が最も長いとか、反対にオーストラリアは「冬至」とかで昼が最も短い日だそうです。親の子になる年が一先とか！ やってみましょう 幸せ運び マル・鳥

今週の倫理 1139号 2019.6.22 ▷ 6.28

「子の親になる前に親の子になれ」の言葉は、「子供を育てる立場となる前に、自分が親の子供に成り切ることが先である」という意味です。これは、社員を育てる経営者の姿勢をも示します。今号は、親と向き合ったことで、会社の経営が好転していった経営者の体験をご紹介します。

6月のテーマ | 感謝という妙薬

親の子になる

人が初めて「感謝」という念を覚える対象は親でしょう。なぜならば、自分の命を生み育んでくれた人だからです。であるからこそ、親に対して抱く感情は、他者とのあらゆる場面でのかかわり方に影響するのかもしれません。

T氏は、創業した飲食関係の店舗を国内・海外に広げています。現在、経営は好調ですが、創業当時は客足が伸びず、社員の定着率も低い、苦境の時期がありました。そのような時、倫理法人会に入会し、生活を営む上での指針となる『万人幸福の栞』に出合い、以下の文に触れて転機を迎えたのです。**【最も大切な、わが命の根元(もと)は、両親である。この事に思い至れば、親を尊敬し、大切にし、日夜孝養をつくすのは、親がえらいからではない、強いからではない。世の中にただ一人の私の親であるからである】**

T氏は幼少期に両親の離婚を経験しました。母親が家を出て一カ月が過ぎた頃、家の電話が鳴り受話器を取ると、母親の声が聞こえてきました。「〇〇ちゃん、寂しくない？」と聞かれ、即座に「うん、寂しくないよ」と答えたのです。この時から、T氏は心に殻を幾重にも重ねていきました。

高校時代の恩師には「あいつは性格が悪いから」と言われ、起業前に勤めていた会社を退職する際、送別会の席では「この会社には、自分を使いこなせる上司がいないから退職します」と挨拶をしました。母親との電話以降、自分の本心に蓋をし続けてきたのです。その後、創業するものの業績は一向に上昇しませんでした――――。

〈自分は親を恨み続けてきた。しかし『栞』には、命の根元を大切にするようにと書いてある。どんな境遇であろうと、自分を生んでくれた事実一点のみにも、親を敬する意味があるんだ〉と学んだT氏は、母親の住所を探し当て、花を持って感謝の気持ちを伝えに行きました。また、疎遠になっていた父と育ての母の誕生日を祝い、素直に向き合うことで、真の意味で三人の親の子となっていったのです。

この後、店を任せられる三人の社員との出会いや雑誌の取材が舞い込み、会社の経営状況が変わっていきました。

会社の経営をする上では、どのような業種でも人とのかかわりが求められます。従業員、お客様、取引先など、人間関係を外した仕事はありえません。人との接点を良好に築いていくためには、「感謝」という心を持つことでしょう。その心を育てる妙薬を精製するには、自分の命のもとである両親と向き合うことから始まるのです。

T氏は以降、定期的に生みの母のもとを訪れ、従妹からは「いい親子ね」と言われる関係を築いています。そして、これから先は、受けた恩に報いる時期と決心しています。

今日もT氏は倫理法人会で、次世代を担う経営者たちに、「感謝」を軸とする倫理経営を伝える役に徹しています。

一般社団法人 倫理研究所 法人局

え・城谷俊也